

中学校 授業レポート

「学習者用デジタル教科書+教材」を活用した授業

「個別最適な学び」を実現(1・3年)

神奈川県横浜市立丸山台中学校

令和3年度から全国の小・中学校に1人1台端末が配備され、学習者用デジタル教科書の活用も広がり始めている。「指導者用」に加えて「学習者用デジタル教科書+教材」(以下、学習者用デジタル教科書)が使われることで、英語の授業はどう変わるのか。昨年度から1人1台のChromebookとともにその活用を始めた横浜市立丸山台中学校の授業取材した。

授業1

もりしたさとし
森下智史先生

第3学年:Unit 7 Tina's Speech

一人一人が自分に適した学び方をする

“Tina's making speech because ____.”
“becauseの後を考えてみよう”。授業が始まって間もなく、森下先生はそう言って教室前方の大型モニターに1枚の絵を映し出した。教科書



学習者用デジタル教科書を開く生徒も、紙の教科書を開く生徒も。

の登場人物の一人で、ロンドンへ引っ越すTinaが、お別れのスピーチをする場面だ。教室を見渡すと、大型モニターを見る生徒もいれば、手元の教科書を見る生徒、Chromebookの画面を見る生徒もいる。学習者用デジタル教科書があることで、生徒一人一人が自分に適した方法で授業に臨んでいる様子がうかがえる。

先生は生徒たちに、最終的にはTinaのスピーチを暗記して発表してもらうことを伝えたいので、まずは新出単語をマスターするよう指示。すると生徒たちは、学習者用デジタル教科書の「New Words」というコンテンツを開く。新出単語が日本語訳とともに並ぶ画面上で、まずはマスク機能を使って日本語を隠す。単語をタップすると流れる音声を聞きながら、生徒はそれぞれの学び方で単語をマスターしていく。



「New Words」の画面。

その後、森下先生は“Listen carefully.”と言い、教室前方の大型モニターを見るよう促した。Tinaのスピーチの実写ドラマが流れると、生徒たちは食い入るようにモニターを見ながら、Tinaの英語に耳を傾ける。スピーチは2分ほど続くが、集中が途切れている様子はない。

続いて先生は、スピーチがどんな内容だったか、わかったことを「ロイロノート・スクール」



本文ストーリーの動画(実写ドラマ)。

上で配布したワークシートに入力するように指示。その際は、もう一度実写ドラマを見てもよいとも伝えた。すらすらと文章を打ち込む生徒もいれば、ドラマを見直す生徒も、ドラマではなくスライドアニメを見て、音声だけに集中している生徒もいる。ここでも、生徒たちは自分に適した方法で、学びを進めていく。

授業が教師主導から生徒主導に変わる

学習者用デジタル教科書を活用するメリットは何なのか。授業終了後、森下先生は次のように語ってくれた。

「これまで、リスニングは大型モニターで流す形だったので、生徒たちは、教師が再生した回数だけしか聞けなかった。でも、学習者用デジタル教科書が入ったことで、それぞれが聞きたい回数だけ聞けるようになった。その結果、教師主導だった授業が生徒主導に変わった」。

新学習指導要領は、子どもたちを「自律的な学習者」にすることを目ざしているが、学習者用デジタル教科書はその実現のためのツールになりえると先生は指摘する。生徒たちは普段から、わからない単語があるとウェブ翻訳ツールで調べたり、教科書本文に戻って確認したりしているそうで、「一人一人が工夫しながら学ぶことが大事。これまで『教えていた部分』をな

るべく生徒自身が主体的に『学んでいく』形で、授業を組み立てている」という。

ところで、1人1台端末の利用に際しては、目の健康を懸念する声もある。この点について森下先生は、「黒板や大型モニターなども併用するなど、生徒たちが画面から目を離す時間を作るようにしている。コロナ禍が収まれば、ペアワークを増やすことによっても、画面を見る時間を減らしていきたい」と話す。

授業2

すみ ゆき え こ ばやし なお こ
角雪絵先生(T1)・小林直子先生(T2)

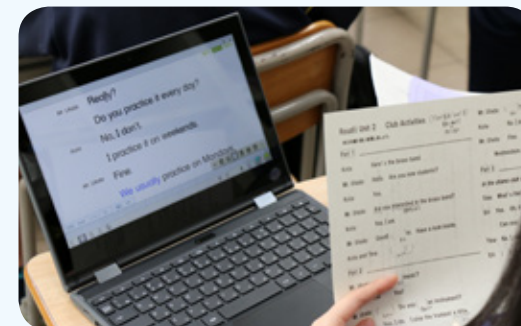
第1学年:Unit 2 Club Activities

36人が36とおりのやり方でReading

1年生の授業は、二人の先生によるTTでスタート。授業の前半は、角先生と小林先生が英語で生徒全員に問いかけ、それに生徒たちが答える形でテンポよく進んでいく。“Who is your favorite YouTuber?”など、1年生が好きそうな質問に、教室には時折、笑い声が響く。

“Please open your Chromebook!”

授業が中盤に差しかったところで、角先生が、各自の端末を開くよう指示。生徒たちは慣れた手つきで学習者用デジタル教科書を開くと同時に、紙のワークシートも用意。ワークシ



学習者用デジタル教科書と紙のワークシートを併用。

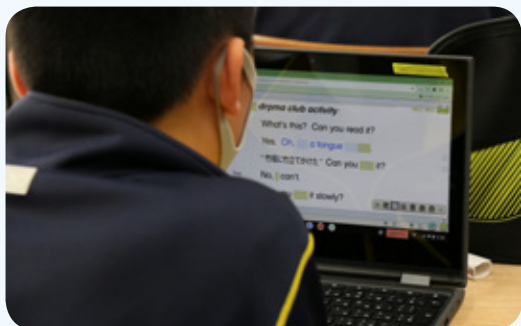
トには、いくつかの単語が穴空きになった
Unit 2の本文が書かれている。

先生はまず、学習者用デジタル教科書の「本文画面」で音声を再生しながらワークシートを読むように言う。すると生徒たちは、一斉にリスニングを始める。再生速度が選べるため、遅めの「^{マイナス}ー3」で聞く生徒もいれば、通常の「ふつう」で聞く生徒もいる。

続いての課題は、本文の音声を聞きながら、自身も登場人物の誰かになって一緒に読む「なりきりReading」。ここでは、穴空きが比較的少ないワークシートを用いても、学習者用デジタル教科書の「新出語マスク」や「ランダムマスク」の機能を使ってもよい。Readingが得意な生徒は、「全てマスク」の機能を使ってもかまわない。もちろん、再生速度も選択できる。

角先生は、「再生速度が速いほうがいいわけでも、マスクが多いほうがいいわけでもないからね。大切なのは、自分の力がいちばん高まる方法を選ぶことだよ」と生徒たちに伝える。その後、数分間は、教室にいる36人の生徒が36とおりのやり方で学びを進めていった。

最後に、代表の生徒4人によるロールプレイが行われたところで授業は終了。ListeningやReading、Speakingなど、内容盛りだくさんの50分間だった。



マスク機能や速度は、生徒が自分の学習状況に合わせて選択。

実現する「個別最適な学び」

学習者用デジタル教科書が入ったことのメリットについて、角先生は「指導の個別化」と「学習の個性化」が図られたことを第一に挙げる。「アナログの場合、穴空きワークシートを何種類も用意する必要があるが、デジタルでは『新出語』『ランダム』『全て』などから生徒が自由に選べる。再生速度も変えられるため、英語が苦手な生徒は、遅めから始めて徐々に速くするなど自己調整を図ることができる」。

「個別最適な学び」ができるようになることは、森下先生も指摘していた点で、学習者用デジタル教科書の大きな強みといえそうだ。角先生と小林先生は「New Words」や「フラッシュカード」なども日常的に活用しており、「知識・技能の定着」という点でも役に立っている」と口をそろえる。



「フラッシュカード」の画面。

ICTが得意ではないとい

う角先生だが、学習者用デジタル教科書への抵抗感はなかったのか。この点については「初期設定さえやってもらえれば、さほど難しくない。わからないことがあれば周囲の人や子どもたちに聞けばよいと思っている」と言う。続けて、デジタル化のおかげで掲示用のフラッシュカードを作成する手間がなくなり、業務負担が軽減されたとも話す。

文部科学省は、英語の学習者用デジタル教科書を希望する小・中学校に無償提供する実証事業を行っているが、これによって現場の状況がどう変わるのか、注目が集まる。